

沿岸底生生物群集

(Natural Geography in Shore Areas: NaGISA)

白山義久 (京大フィールド研)

キーワード： 生物多様性、沿岸生物、地理的パターン、統一プロトコル

1. はじめに

生物多様性の危機とその保全の必要性が叫ばれているが、海洋生物については多様性の実態そのものの解明が不十分で、有効な対策を取るための基礎資料が不足している。NaGISAは統一プロトコルによるサンプリングと分類学のキャパシティビルディングを通して、世界各地の沿岸生物の多様性を地域間で比較し、沿岸生物のモニタリングのしくみを創ろうとする研究プログラムである。

2. NaGISA とは

NaGISA (Natural Geography In Shore Area) プロジェクトは、世界の海洋に生息する海洋生物の多様性、分布、個体数を評価し解明するために企画された科学研究プログラムである海洋生物のセンサス (Census of Marine Life, CoML, <http://www.coml.org/>) プロジェクトの中のひとつのフィールドプロジェクトである。白山が PI を務め、瀬戸臨海実験所を HQ として北米・南米・東南アジアなどを中心に、すでに 50 カ国以上が参加している国際プロジェクトでもある。

3. サンプリング

このフィールドプロジェクトは、沿岸生物の多様性の地理的パターンを地球規模で明らかすることを目指しており、すべての参加者が統一された方法で海洋生物を採集・分析し、そのデータを持ち寄って地域間比較をする。できるだけ多くの人が参加できるように、その方法は専門家以外でも実施が可能な平易なものになっており、我が国では NGO が、またアメリカのアラスカ州では多くの一般市民がサンプリングに参加している。また日本 (田辺商業) とアメリカの高校生 (フロリダ州ナイスビル高校) が共同でサンプリングを実施したケースもある。

4. 分類学の振興

NaGISA では各国に、自力で分類同定を行うことができる、いわゆるパラタクソノミストを養成することをめざして、分

類学の教育コースを 2003 年 9 月から開設しており、すでに 10 回を数える。従来は講師以外に参加者の旅費も大部分は NaGISA が負担してきたが、この取組みはたいへん好評で、南米から手弁当で参加する学生もいるようになった。

各国で参加者が出したデータは、NaGISA のポータルサイトに納められ、参加者は自由にデータにアクセスして、結果の解析を進めている。

5. 今後の展開

NaGISA は CoML 同様スローン財団からの奨学寄付金を中心として活動してきているが、日本および東アジアについてはさらに日本財団をはじめとして、日本学術振興会や環境省の地球推進費などからも、部分的な資金援助を受けてきた。しかしすべてのこれらの資金は、2010 年以降の見通しはたっていない。今後継続して資金を調達することが、NaGISA の現在の課題である。

6. NaGISA の先にあるもの

NaGISA は 2010 年までの期間限定の研究プログラムであるが、その究極の目的は、気象庁が気温や水温を測定しているように、海洋生物の多様性を世界規模で政府機関がルーチンワークとして観測するような態勢を整えることである。50 年いやそれ以上にわたって世界中でこのようなモニタリングが行われれば、地球環境の変化にともなう海洋生物相の地理的变化を検知し、その保全に有効な対策を、科学的データに基づいて議論できるだろうと期待している。

幸運にも、環境省のモニタリング 1000 事業が、NaGISA のコンセプトを取り入れてくれたため、日本国内では継続的に長期的な沿岸生物のモニタリングが行われる見通しがついた。今後は生物多様性条約や海洋保護区などの活動と連携して、世界規模で研究というよりは事業として NaGISA が実施されることに期待をしている。なお NaGISA 計画に関する情報は、<http://www.nagisa.coml.org/> から、得ることができる。